

## メーリングリストから見た山田村

小松 裕子・小郷 直言\*

(平成10年10月15日受理)

### 要 旨

山田村メーリングリストは、発足してから約10ヵ月となる。平成10年9月末現在メンバーは142名で、村民が65%、村外者35%の割合で、村外者の多くは「電腦村ふれあい祭」や「電子メール講習会」など、村の情報化行事に関心を寄せて集まった支援者である。

メーリングリストで交わされる会話は、次々と対面行事（イベント）の実施へと発展しており、村に人々が集まる機会を作りだしている。そうした機会は、村内のコンピュータ利用の促進や広がりを見せ、少しずつ促すことにつながっている。

本稿では、山田村の村民と外部支援者の活動とメーリングリストを介した会話から、村民が情報化を自らの手で進めていく様相と実状を解析する。

### キーワード

山田村、メーリングリスト、支援、情報化、情報技術、インターネット

### 1. はじめに

山田村の情報化が社会的に注目された理由の一つには、次のようなことがあると考えられる。「山田村」という、都会から見てかなり「村」的要素の名残が強そうなところに、突然、「インターネットに接続された村」という「超」近代的な村が登場して日本中を驚かすことになった。都市社会がやっと情報化のスピードを速めつつあるのに、富山県の山中の住民約2,000人の小さな過疎と高齢化が進む山村が、一挙にコンピュータ・ネットワーク社会の一員に名乗りを上げた。そして、ニューメディアやそれまで山田村について無知・無関心であった人々が興味をもって注目した

ことは、「村の情報化」がどのような影響を村民一人一人に及ぼすのか、村全体はどのように変化していくのか、などであった。

ただし、こうしたことに関心がもたれるそもその発端には、生活の場を都市と田舎(村、農村)に二分してとらえるという一般的な慣習が大きく関わっているように思われる。こうした見方に従えば、情報化の影響にも都市型と農村型 (urban vs. rural) という二分類をあてはめなくてはならないのは当然ともいえる。

しかし、山田村を典型的なむら社会 (village community) あるいは農村共同体 (rural community) のように考えることはもちろんできない。一般にいわれるむら社会の典型的な特徴をあげれば、各人各戸の親密度が高く、

生産や生活面で相互依存性が強い集団である。むらがあつての個人という意識、私生活への干渉もなんら珍しいことではない。祭りや慶弔の際には大勢の人が参加し、相互扶助が発達している。また、その一方では伝統的秩序に基づく規制、むらの閉鎖性によるわずらわしさや保守性などがデメリットとして取り上げられたりする。

たしかに現地での調査からも、精神的風土として上記のような気質とむらとしての雰囲気は最初は強く感じずにはいられなかった。しかし調査を続けていけば、その反面、いわゆる「農村の都市化」とよばれる実態が大きなものであることも同時に実感せざるをえなくなる。その実態とは、農村社会が都市に外延的に包摂されるかたちで、農村特有の生活様式に代わって近代的な都市生活様式が村中に浸透していることを指す。農民の兼業化が進み、都会（富山市や高岡市という都市）へ勤めに出かけ、子どもは高校生になれば村外へ通学する。都市と同じような施設、設備、サービスも小さいながらもかなり完備している。住民はテレビ、ファックスなどの電化製品の所有は言うに及ばず、2台以上の自家用車で休日には都会方面へショッピングに出かける。これが日常の生活様式と化している。

もしも先の二分法をとるとするならば、こうした実態をふまえて、都市型と農村型との情報化の違いを検討していかなければならない、しかし、このことはかなりの問題提起をはらんでいる。なぜなら、農村の都市化が当然のようにこのまま進んでいくとするならば、山田村はまさにいまその過程にあるわけで、山田村における調査は「都市化するむらにおける情報化の影響について」という調査研究の一事例になるのであろうか。こうした社会的に見たアプローチの曖昧さは調査する者に少なからず不安を与えるものになっている。しかしながら、現在のところ「むら」というものに固執するべきか、「都市化」に焦点を置

くべきかという点は一時棚上げにして、われわれが現実に行った調査の記述とそれに基づいた幾つかの説明と解釈を述べることに努力を傾けることにした。

第2章では、山田村での情報化の歩み、すなわち、この2年余りでなされてきたさまざまな取り組みについて、それに参加した住民と外部支援者に焦点を当てる。第3章と第4章では、第2章で述べた歩みと活動を通して、本文の主眼点であるメーリングリストを介した情報化の進展の様相と実状を解析する。具体的には山田村の住民が情報化（ここではコンピュータの利用を続け広めることが中心となっている）を自らの手で何とか進めていくために編み出した「年間を通してのイベントの開催」と「メーリングリストを介した会話の輪」の広がりについて述べることにした。

## 2. 山田村の情報化の歩み

山田村は、地域の情報化の事例として取り上げられることが多いが、モデル化の指定をうけた際の主目的は、過疎地域の活性化、福祉への利用、行政サービスというように、一般の地域と格別変わったものでなかった。<sup>\*1</sup>

しかし、まず希望する家庭にパソコンを全て配付するという手順をとったことで、その後の情報化のありようが大きく他の地域と異なっただと思われる。現在、山田村が情報化を進め、かなりの実績を残してきたことには、導入当初にリーダーシップをもった人材がいたこと、住民組織の基盤があったこと、役場が住民主体の態度をとってきたことなどの村内の要因と、ボランティア精神の学生や社会人が村に強く関心を示したなどの村外からの要因が考えられる。<sup>1-4)</sup>

本章では、村で行われてきた情報化への取り組みとこれらの人的要因について、情報化になんらかの関わりをもった村民約250名と村外社会人約60名、学生約180名の個別活動の記

録をもとにした調査結果を示す。<sup>\*2</sup>

## 2.1 情報化の経緯と関連するグループ

表1は、山田村の情報化を、①パソコンが配付される以前、②配付されてからの1年間、③2年目（夏）、④2年目（秋～）、⑤3年目（夏～現在）の5つの期間にわけて、情報化の取り組み、その時に関係した村内グループ、村外者グループについて簡単にまとめたものである。その中で、村内の各グループごとの関係の流れを図1に示した。

ここで言うグループとは、これまでの活動が情報化とかかわったグループであるが、必ずしもネットワーク上のものを指すのではなく、実生活における一般的な仲間グループをも指す。

表1 山田村情報化をとりまく内外のグループ

	イベント	村内グループ	村外グループ
平成8年 夏以前		ふるさと塾生	
平成8年 夏～	パソコン配付	パソコンリーダー 小さな勉強会 グループ	個別ボランティア
平成9年 夏	ふれあい祭	こうりやく隊	全国から集まった 学生
平成9年 秋～	文化祭	こうりやく隊、 パソコンリーダー	村外社会人 (勝手に応援する会)
	各種講習会	文化祭実行委員、 講習会参加者	
	メーリング リスト		
平成10年 夏～	ふれあい祭	新こうりやく隊	学生・村外社会人
	メーリング リスト 各種イベント		

以下、各グループの活動やその関係を表1、図1に沿って説明する。

### ① 平成8年7月以前（パソコン導入前）

パソコンが配付される3年前から、山田村には「ふるさと塾<sup>\*3</sup>」という村の活性化を考えるグループが存在していた。特に2期生（14名）は、村民や村に勤務する村外者へ「山田村はどんな村か」というアンケートを実施し、

その結果をもとに文化祭で賛成派と反対派に分かれて「山田村って本当に住みいいの？」というディベート劇を実施するなど、自らの村への関心が高かった。彼らはその後の情報化推進の主力メンバーとなっていく。

### ② 平成8年夏～平成9年春

（パソコン配付とパソコンリーダー）

パソコン普及を目的に各集落別に1～2名の「パソコンリーダー（45名）<sup>\*4</sup>」が決められ、推進の一翼を担うこととなる。

パソコン配付時には、早稲田大学の学生が泊まり込みで設置のボランティアをし、この時の学生の数名は、後の学生で企画した「ふれあい祭」にも積極的に参加している。

個別の活動としては、これまで村の情報化に強力なリーダーシップを持っていたK氏のもと、女性グループ「アップルプリンセス」（当時の婦人会のメンバーで30～60代女性10名程度）、ホームページ作成目的の「アップルナイツ」（5～6名）、家族単位での勉強グループ「バナナクラブ」（20名程度）がつつぎつつぎに結成される。「アップルプリンセス」は、後に4名となり地元の大学の支援を受ける。「アップルナイツ」は1ヵ月の活動後解散。「バナナクラブ」はその後「バナナサロン」と名を変え、現在2～3名に縮小されている。

以上、パソコンリーダー、学生ボランティア、K氏中心グループなど互いに関連せずに単発的にグループが発生したり縮小、解散した一年である。

### ③ 平成9年夏

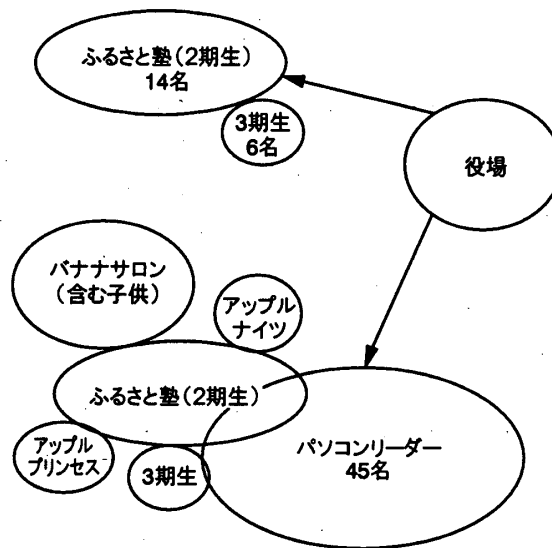
（ふれあい祭と学生グループ・こうりやく隊）

就職関係のメーリングリストで知り合い山田村を訪れた学生（5名）が、インターネットを使って多くの学生メンバーを募り、村の情報化の手助けをしようと「ふれあい祭<sup>\*5</sup>」を企画をすることとなった。それに対して村では、「ふるさと塾」の2期生が中心となって、受け入れの準備をすることになり、それまでばらばらに活動していたグループや個人も加

## ①平成8年夏以前

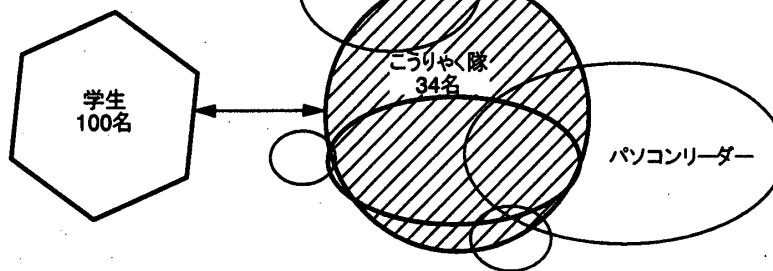
## ②平成8年夏～

パソコン配付  
パソコンリーダー制  
ちいさなグループ



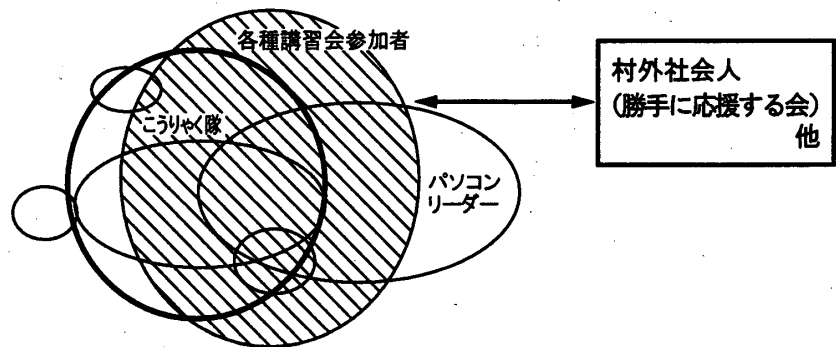
## ③平成9年夏

ふれあい祭



## ④平成9年秋～

文化祭  
山田村メーリングリスト  
文化祭向け講習会  
電子メール講習会  
高岡短期大学公開講座



## ⑤平成10年夏～

ふれあい祭'98  
各種イベント

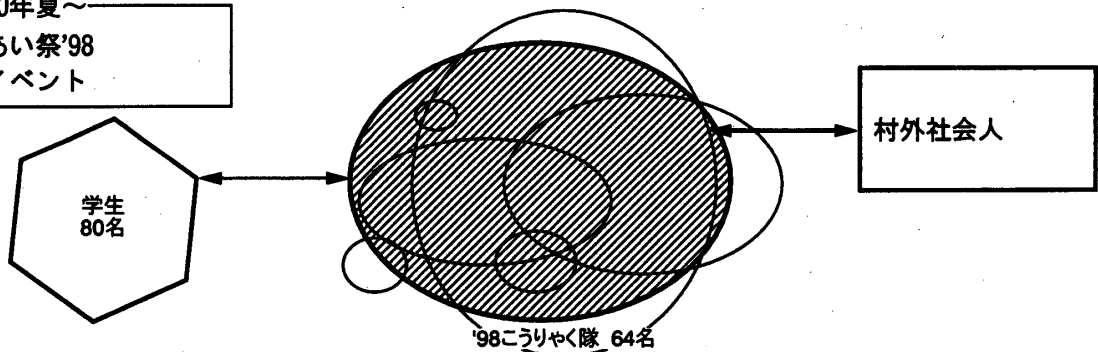


図1 グループネットワーク図

わって、「こうりゃく隊 (34名)\*6」という名で1つのグループとして活動が始まった。当時の「こうりゃく隊」の多くはコンピュータを日常的に利用しておらず、連絡は電子メールの他、電話、口コミといった手段がとられて、グループの人数が増えていった。

#### ④ 平成9年秋～

(講習会・メーリングリストと村外社会人)

利用者の拡大とレベルアップを目的にした文化祭をきっかけに、ポスターや名札づくりの講習会と電子メール講習会が実施された。その講習会では、村外社会人ボランティアグループ「山田村を勝手に応援する会\*7」(15～20名)が支援をすることになり、「文化祭実行委員」と「こうりゃく隊」、「パソコンリーダー」を対象に実施された。その後、「パソコンリーダー」が講師、「勝手に応援する会」がサポート役になって村民全員への電子メール講習会が開かれた。平成10年6月の高岡短期大学の公開講座までの村民の講習会参加者は82名(全村民対象電子メール講習会受講者は除く)にのぼる。

平成9年12月の「メーリングリスト」の開設をきっかけに、ネットワークと対面という2重構造での交流が始まったのもこの時期である。

この半年間は、「山田村を勝手に応援する会」など村外者との交流を足がかりに村内のグループの統合が一気に行われ人の広がりが大きく発展した時期といえよう。

#### ⑤ 平成10年夏～

(ふれあい祭と新こうりゃく隊・学生・村外社会人)

第2回ふれあい祭には、前回の「こうりゃく隊」に加えて、「パソコンリーダー」や「講習会参加者」などが加わり、「新こうりゃく隊」として64名が名を連ねた。1回目の「ふれあい祭」は、学生と村という形で実施されたが、2回目は学生と村そして村外社会人が参加した。現在は、村外社会人と村民でつくるメー

リングリストを介して交流が活発に行われている。

## 2.2 3つのグループ

前節でみたように、こうりゃく隊を中心にした「村民グループ」とふれあい祭で集まった「学生グループ」、山田村を勝手に応援する会を中心にした「村外社会人グループ」という3つのグループが存在する。これらのグループを個別にその特徴を紹介する。

### (1) 村民グループ

現在、村には、各集落の気軽な相談窓口としての「パソコンリーダー」、ふれあい祭を機に結成された「こうりゃく隊」という2つのグループがある。図1にみるようにパソコン配付当初には、小さな勉強グループがいくつかできたが、ふれあい祭や文化祭など村全体で対応する行事を経ていくことで、吸収されたり、消滅したりしている。また、各種講習会や行事に参加したことで「こうりゃく隊」に加わる者やパソコンリーダーと掛け持ちする村民もあり、2回目のふれあい祭をきっかけに再構成された「こうりゃく隊」は64名のグループとなっている。

### (2) 学生グループ

平成9年の夏に山田村で開かれた「ふれあい祭」には、全国の学生100名が集まった。その祭は、山田村の情報化を助け、村民と一緒に情報を考えるという主旨であり、学生達はインターネットの電子メールやホームページを介して集まったグループであった。平成10年の夏には、新たにインターネットを駆使して80名の学生が集まり、第2回目の「ふれあい祭」が実施された。第1回目にかかわった学生の多くは当時卒業学年であったため、1回目の祭の経験者は非常に少ない状況であったが、学生同士は、学生のメーリングリストを通して連絡をとりあい、オフミ(オフラインミーティング)と称して関東や関西の地区に集まり、或いは山田村に集まって計画を練っ

ていった。結局、この2年で180名程度の学生が山田村を訪れたことになる。

### (3) 村外社会人グループ

山田村で行われた各種講習会を支援した社会人は30名を越える。その多くが「山田村を勝手に応援する会」の一員ではあるが、会社員、大学教員、ボーイスカウト、主婦などメンバーが固定しているわけではなく、山田村から支援の要請があれば、各自自分の都合のよい内容や時間帯に駆けつけるという集まりであり、山田村で初めて顔をあわせたというメンバーも多い。それぞれに山田村に関心があること、ボランティア精神が強いこと、もともとパソコンに関するつながりがあったなど理由はさまざまである。その他、個別に村民と交流を持ってきた社会人も最近では合同でイベントを実施することが多くなっている。

以上のように山田村で少しずつ形になってきている情報化には、いくつか発生したグループが様々な情報化の行事を経てまとまった「村民グループ」、ふれあい祭というイベントで集まった「学生グループ」、講習会のボランティア活動を通じて集まった「村外社会人グループ」の存在が非常に大きな位置をしめる。もちろん個人と個人の交流や親交の発生があることは言うまでもないが、そうした個人的にやりとりされる電子メールであれ、共通の場としてのメーリングリストであれ、そこで交わされる会話では、明らかにそれぞれのグループの一員であるという立場で話されることが多い。

それぞれのグループは、メンバーは流動的で、なにかある時に気軽に声をかけあうという点で共通点があるが、「村民グループ」は、実際の行事のほとんどが山田村で行われているという点や同じ村に住む実生活上の連絡や集会、行事などでのつながりがある点で、他のグループに比べ村民同士の関係は深い。他方、「学生グループ」は、主にネットワークを介して、年に1度のふれあい祭で知り合った

者同士の集まりであり、「村外社会人グループ」も山田村に集まる個々人の集まりである。

これらグループ内の個々人の関係の強さを「強度」と言い表せば、村民同士の強度は強く、学生同士、社会人同士の強度は弱いという特徴がある。また、各グループ間の親密度やインフォーマル度を「結合度」と言い表せば、学生グループと社会人グループの結合度は弱く、村民グループと学生グループ、村民グループと社会人グループの結合度は強いという関係がある。こうした関係は、ネットワークを媒介にしながらも、あくまでも「山田村」という地を舞台に人が集まっていることを再認識させる。

## 3. 山田村メーリングリスト

これまで見てきたように、さまざまな情報化の行事を機に集まったグループは、引き続いて山田村に関心を持ち続けている。それを支えるものは、継続的に実施される村民と村外者の共同イベントであり、そのイベント実施には、メーリングリストが非常に大きな役割を果たしている。

山田村が運営しているメーリングリストは、村内のネットワーク利用の向上と相互の学習を目的に、平成9年11月に立ち上げられたもので、最近では日に20通以上の会話が交わされることもある非常に活発なメーリングリストである。以下のデータは、立ち上げから10ヵ月間（平成10年9月末まで）、およそ2,700通の会話データを整理したものである。<sup>\*8</sup>

### 3.1 メーリングリストメンバー

#### (1) 構成メンバー

図2は、メーリングリストメンバーの「村民グループ」、「村外社会人グループ」、「学生グループ」の推移グラフである。総勢142名（村民93、村外社会人36、学生13<sup>\*9</sup>）で、村民が約65%を占めるが、徐々に村外者が増える傾向

にある。脱退者は現在のところ1名である。村内のメンバーの多くは、「こうりゃく隊」や「パソコンリーダ」、「講習会参加者」であり、村外者は「山田村を勝手に応援する会」のメンバーが主体となっているが、最近では「ふれあい祭」をきっかけに学生のメンバーも増加の傾向にある。また、村のメーリングリストのアカウントは、都合上各家庭に1つであるため家族共同で利用しているメンバーも多く、村民の実質的メンバー数はさらに多いと思われる。

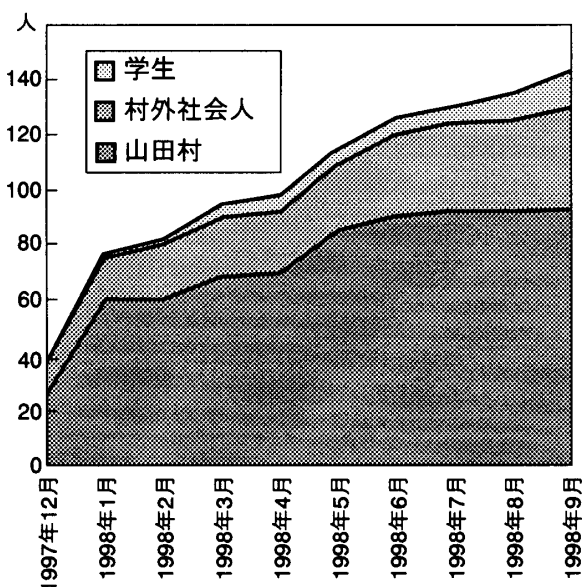


図2 メーリングリストメンバー推移

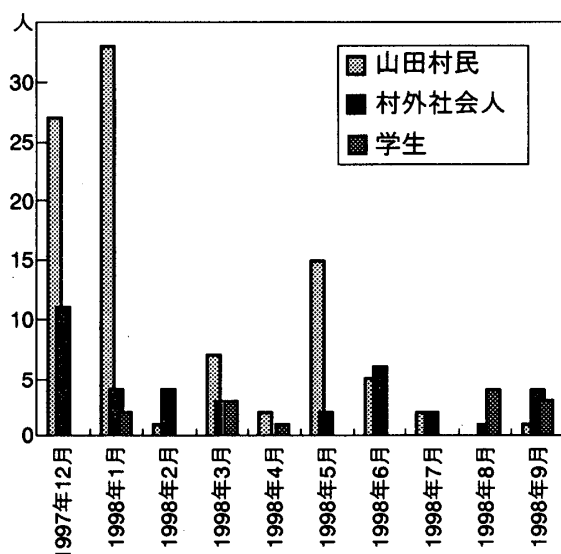


図3 メーリングリスト月別新規加入者

## (2) 新規メンバー

図3は、新規加入者のグループ別のグラフである。村民の加入は、12月、1月、3月、5月が多い。12月はメーリングリスト立ち上げ直後の月のため、1月は12月の電子メール講習会を終えて支援者と個人的にメールを交わしたことがきっかけで、3月は、2月に行われた村のスノーフェスタへ村外者が参加して友好を深めたこと、5月は、6月の講習会を受講するためメーリングリストへも加入したこと、未加入のパソコンリーダへ村民が声かけしたことなどがきっかけとなっている。村外社会人は、12月、6月に加入が多く、これは、12月の電子メール講習会、6月の高岡短期大学ホームページ講習会へ支援に来たことがきっかけと思われる。

平成9年の電子メール講習会の打ち上げ懇親会の後、加入した村民からのメールと村民のパソコン利用の促進に悩んでいた情報センター担当者からのメールを紹介する

新入社員ではなく新入会員の〇〇です。遅ればせながら、MLの仲間に加えて頂きます。

初め山田のもんばかりだったら、入るのをやめようかと思っていましたが、23日の懇親会で話しているうちに、これは、はいらんかったら話題に残されると思い、ハスキーな××ちゃんにお願いして入会しました。

その様なわけで、「山田村を勝手応援する会」ととても近親感じゃなくて親近感を感じております。また一つ自分にとって人と人とのネットワークが増えました。

それから、昨夜はありがとうございました。みんな元気でとっても楽しかったです。

にぎやかな交流がもてくすぶっていたものがはじけた感じです。通信のつながりが、いよいよ、生身の付き合いに…、やはり「人」だなあと実感します。

## (3) 発言数

図4は、村民・村外者別に月毎の発言数を

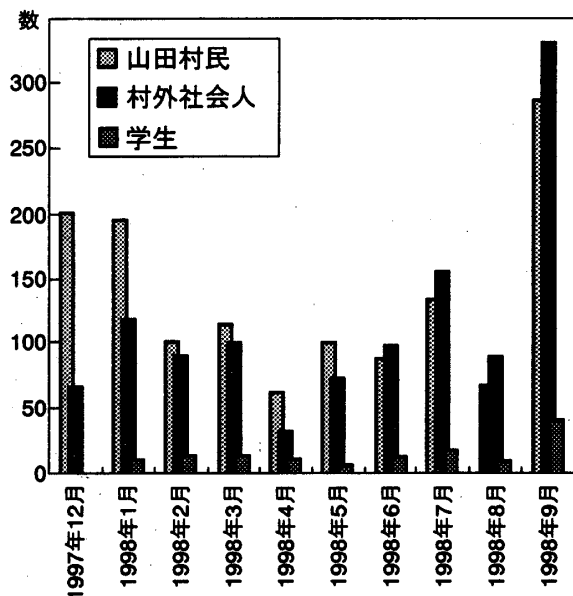


図4 メーリングリスト月別発言数

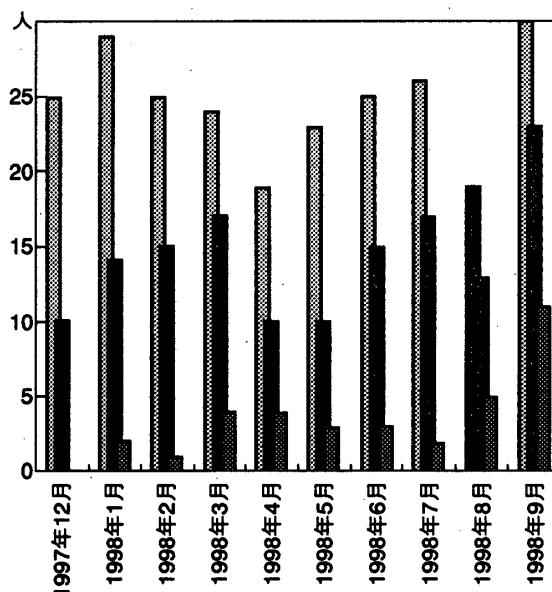


図5 メーリングリスト月別発言者数

示したものである。9月末現在で総数2,671通の発言があり、月によって多少数にばらつきはあるものの、250～300通／月交わされている。また、村民と村外者の発言数はほぼ同数であり、当初6ヵ月は村民が最近の4ヵ月は村外者がわずかに多くなっている。

(4) 発言者

図5は、村民・村外者別の月毎の発言者の人数で、1人あたりの発言数は考慮していない。それぞれの割合では、村民は村民中約30%、村外者は村外者中約60%が発言している（各月の割合の平均値）。一般に興味・関心で集まるメーリングリストやフォーラムでは、発言者1に対し非発言者7（発言者割合15%）といわれるが、それに比べると発言数も発言者も多いということがわかる。<sup>5)</sup>

表2は、村民・村外者別に発言数上位者を加入月順にならべ、その後の発言月を示したものである。両グループとも発言数の多い人ほど、各月継続的に発言しており、特に発言数の多い人は、それぞれのグループに2～3名ずつおり、その発言内容をみると、いろいろな話題を提供したり他の発言者に対してすばやく返答するなど、単に発言数が多いだけでなく、メーリングリストを活性化させよう

表2 上位発言者の発言月(加入月順)

村民	97/12	98/01	98/02	98/03	98/04	98/05	98/06	98/07	98/08	98/09
1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
2	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
4	*	*	*	*	*	*	*	*		*
5	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
6	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
7	*	*	*	*		*		*		*
8	*	*	*		*		*			
9	*	*				*	*	*	*	*
10	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
11	*	*		*				*		*
12	*	*	*	*	*	*	*	*		
13	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
14	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
15	*	*	*	*	*					*
16	*		*	*	*	*				
17		*	*	*	*	*	*	*	*	*
18		*	*	*		*	*	*	*	*
19		*					*	*	*	*
20				*			*	*	*	*
21				*		*	*			*
22				*	*	*	*	*	*	*
23					*	*	*	*	*	*
24							*	*	*	*

村/外者	97/12	98/01	98/02	98/03	98/04	98/05	98/06	98/07	98/08	98/09
1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
2	*	*	*	*		*	*	*	*	*
3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
4	*	*	*	*	*		*	*	*	*
5	*	*	*			*	*	*	*	*
6	*	*	*	*	*		*	*		*
7	*	*	*	*	*	*		*	*	*
8	*	*	*	*	*					*
9	*	*	*						*	*
10		*	*	*	*	*	*	*	*	*
11		*	*	*			*	*	*	*
12		*		*		*				
13		*	*	*	*				*	
14			*	*				*		*
15			*	*			*			
16				*	*	*	*			*
17						*	*	*	*	*
18						*	*	*	*	*
19							*	*	*	*
20							*	*		



という配慮がある。

### 3.2 メーリングリストの内容

図6は、メーリングリストの発言内容を5つに分類し、話題の傾向を調べ、割合を示したものである。表3はその会話内容を列記したものである。

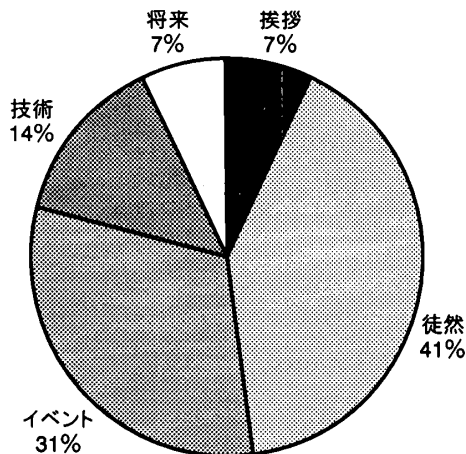


図6 メーリングリスト会話内容の割合

#### (1) 新メンバーの自己紹介と歓迎メール

メーリングリストへの加入には、一切の制限はなく、山田村に興味を持った人ならだれでもメンバーとなることができる。とくに取り決めをしたわけではないが、全員が実名で自己紹介がなされる。また村民の場合、自己紹介の他、情報センターから新メンバーについて先に紹介がされることもあり、互いのひととなりがある程度全メンバーにわかるという点は特徴の一つである。

#### (2) 日常生活での体験や感じたことなどのつれづれメール

山田村のメーリングリストは、村民の利用率をあげ、互いに困ったときに気軽に相談する場をつくること、および、村内、村外をふくめた交流のひろがりを目指したものである。決まった趣味や知識を目的に集まったグループのものではない。よって発言の内容が「つれづれ」に分類されるものが多く、それがかえってメーリングリストの活性化に

寄与している。つれづれの中には、後にイベント（開催日時が決定した行事）へ発展していく過程段階の会話も多く含まれており、単なる体験談に終わらせずに、うまくイベント、つまり多人数の対面交流へ発展させていると言える。

#### (3) 日時を決めた実施確定のイベントに関する話題メール

イベントは、互いに顔と顔をあわせて実施する体験行事であり、そのイベントが開催された月やその前後の月に加入者が増えたり、発言数が多くなるという傾向がある。これまでにメーリングリスト上で話された主なイベントをあげてみると、「電子メール講習会」「牛岳スノーフェスタ（雪合戦出場）」「蕎麦打ち」「さくらんぼ、デラウェア試食会」「高岡短期大学公開講座」「牛岳登山」「ふれあい祭（きもだめし）」「ふれあい農園（とうもろこし）」「ふれあい農園（そば花見会）」「牛岳いも祭」などで、現在も「芋煮会」「ハイキング」「蕎麦打ち会」などで、盛り上がりを見せている。

これらのイベントの特徴は、メーリングリストの会員以外にその家族、友人などあらゆるひとが参加の対象となっている点である。

#### (4) パソコンやインターネットなどさまざまな技術に関するQ&Aメール

これまでに交わされた内容を列記してみると、「カートリッジの故障」「どうしてプリンターが動かないの」「メモリを増やすにはどうしたらいいの」「データの容量はどこを見ればわかるの」「バージョンアップで失敗」「村特有のネットワーク設定」「機種依存文字」「画像変換ソフトについて」など様々である。概して基本的な質問が多い。一般に多くのメンバーが加入しているメーリングリストでは、基礎的な質問には、「自分で調べてからにしろ」という揶揄がはいったり、あるメーリングリストでは「質問をうけつけない」といった対応をとるものもある。しかしながら、村のメーリングリストでは、こうした質問に丁寧に答

表3 メーリングリストでの話題(会話内容)(平成9年12月～平成10年10月)

月 実施イベント	つれづれ	イベント関係	技術Q & A	将来について
12月 電子メール講習会 講習会打ち上げ	メリークリスマス 年賀状あれこれ パソコン失敗段	電子メール講習会 講習会打ち上げ	データの変換方法 ディスク容量 プリンタートラブル インクカートリッジ TA, IE4.0	これからの山田村 パソコンリーダーの役割
1月	賀正 牛岳トンネル 新婦農道 村にはじめての信号機 男子厨房に入ろう 誕生日、大雪	スノーフェスタ (雪合戦に参加しよう)	タッチタイプ プリンター故障 携帯電話(in 山田村) 海外へ和文メール	パソコン難民 今年に向けて
2月 スノーフェスタ	スノーボード インフルエンザ そばがき、ラーメン 紙飛行機	スノーフェスタ (ネットで作戦会議)	漢字変換 ホームページアドレス ネットワーク設定 メールのバックアップ マウス不良	村外の人とのつながり 村の中のこと
3月 そば打ち会 ラーメン試食 ふれあい祭オフ会	村レストラン新メニュー スキー オートキャンプ おろろ(虫)、花 山菜どろぼう 名字や地名	そば打ち ラーメン試食 ふれあい祭 オフ会	プリンター不良 モニター不良 タッチタイプ インターネットビデオ	メールの力
4月	山田村地区の名前 雪 体験農場	さくらんぼ試食会 農業体験 ふれあい祭 新こうりやく隊募集	機種依存文字 掲示版(学生作成) OSのアップデート	
5月 ふれあい農園(開始)	山菜どろぼう B級グルメ 農園 メール1000通目	山田村電腦塾 ふれあい農園 牛岳山開き ふれあい祭	ネットワークのケーブル ビデオカメラ モニター不良	
6月 高岡短大公開講座 公開講座打ち上げ (村外で実施) ふれあい農園 (草むしり)	エコクッキング (全国優勝レシピ) ふれあい農園 (タヌキ)	高岡短大公開講座 (ホームページ作成) 公開講座打ち上げ 農園(作業)	トラブル集 画像ソフト FTPソフト PPP接続	トラブル集をつくろう
7月 牛岳芋まつり 牛岳登山	おぼくさん ビールについて パラグライダー 山田村の歴史	ふれあい祭 (各種イベント紹介) 農園(とうもろこし) 牛岳登山 芋まつり(雪合戦雪尋戦) 万葉歌会(高岡)	マシントラブル (週末お助け隊) TA 写真の扱い 山田村特有の設定 NTTのサポート	
8月 ふれあい祭 農園収穫祭 きもだめし	ふれあい農園 デラウェア試食会 パラグライダー	ふれあい祭 (収穫祭、きもだめし他) おたすけ隊 農園(そば種まき)	GIFファイルの扱い	ボランティアについて
9月 そば花見	アサーティブネス カップル誕生 芋煮 教材セールスマン メール2000通目	農園(そば花見) 万葉歌会(練習) 芋煮会	GIFファイルの扱い ハードディスクトラブル ホームページ 添付ファイル ネチケット	インターネット販売
10月 万葉歌会出場(村外)	昆虫王国 ばばかじ(魚) とちとどんぐりの木 高岡短期大学TV講座	山田村探訪 (ハイキング) 芋煮会	メールの漢字表示 メールアドレス	高岡短期大学TV講座
(以下10月15日現在以降予定されているイベント) 芋煮会(10月) ハイキング(10月) そば打ち(11月)				

えることが、繰り返し話題にされている。<sup>\*10</sup>

#### 4. メーリングリストにみる山田村

前章では、この10ヵ月間のメーリングリストの内容を述べてきた。ここでは、このメーリングリストの分析から明らかになった山田村の特徴を整理してみたい。

##### (1) 実名の集まり

山田村に集まるグループは、ネットワークを介さない人は言うまでもなく、メーリングリストのメンバーもすべて実名である。さらに、山田村のメーリングリストでは、身元(名前や職業、年齢、家族)まで明らかにされていることが多く、メーリングリスト管理局である情報センターでは、村の新規メンバーについて、ちょっとしたコメントをつけて紹介をしている。そうすることで、メーリングリストをより身近に、敷居を低くしたいという情報センターの考えがある。

しかし、山田村メーリングリストはメンバーに限ったものではないので、プライバシーの面では非常に危険を伴うことにもなる。それを防いでいるのは、誰かが顔見知りであることや、頻繁に行われるイベントにより対面的情報を得ることができるためである。

また、山田村メーリングリストは、データからも分かるとおり非常に活発である。発言しない村民も村で実施される行事には抵抗なく自然に参加でき、知らない同士が知り合いになり、それがきっかけでネットワーク上で発言することも起こっている。逆に村外社会人の中で、メーリングリストへの発言がないのは、一度も村へ足を運んだことがないという人(6名)でほぼ占められている。

##### (2) 互助支援

学生グループが村に来るきっかけとなった「ふれあい祭」のメインのテーマは、村の情報化を助けるというもので、それは各家庭を訪問するという「パソコンお助け隊<sup>\*11</sup>」とし

て実現している。村外社会人グループは、講習会での支援をきっかけに村民と交流が始まった。そうした村外者を多く含んだメーリングリスト内でのパソコンに関する質問への支援には、互いを尊重し合う会話で、相手のレベルにあわせた技術的説明がされる。

また、メール上で解決できない場合には、村民および村外者が互いに声を掛け合って都合の良い時間に実際にその家へ足を運んで支援し、その支援内容がその後必ずメーリングリストで流される。こうしたことがメール利用者を増やしたりイベントへの参加を促すことに繋がってもいるのである。

以下のメールのやりとりは、ある村民の家庭のパソコンが故障し、複数の村民と村外者が知恵を出し合って復旧を試み、結局OSからの再インストールを実施したときの会話である。

××さん△△さん昨日は遅くまでありがとうございました。お陰様で今のところ順調です。順次ソフトをインストールして行きます。なんとか全部無事にインストール出来る事を祈っています。

今度こそ完治していたら良いですね。コンピュータのトラブルは本当に難しいですね。つくづく自分の非力を痛感しました。

騒ぐばかりでちっとも役に立たなくてごめんなさい。今度ビールでも持って、お詫びに参ります(おいおい、自分が飲みたいだけだろ)。

##### (3) 体験的発言の重要性

メーリングリストの会話の内容では、体験的発言(つれづれ項目)が一番多い。特に発言数が多い月は、その傾向が強くなる。発言数が多くなる事によるメーリングリスト離れはいまのところそう深刻ではなく、村民、村外者の双方から種々多様な情報資源が動員され、常識の共有される会話とされない会話が互いに刺激しあって、イベント企画へと発展することが多くなるとともに、発言数や発言

者の増加を促している。

村民の中には、発言はしないがイベントには参加する人もいて、メーリングリストを見ていないわけではないことがわかる。また、筆者らのインタビューに答えた村民の1人からは、「他の人のようにすばやく人の話に反応できないので、なかなかメールを出せない。だけどいつも見ているんですよ。今度のイベントに行きませんか？」と誘いを受けたこともある。他には、送信が技術的に不安であるという人、人前で話すのが恥ずかしいという人など様々である。情報センターでは、「初めは見るだけでもいいからメーリングリストに入りませんか。」と村民に声をかけていることもあって、そうした村民のなかには、興味のある話題になら参加する人もいる。

自然観察（草木や昆虫）に関する質問に対して、村のメンバーが答えたメールの一部を紹介する。

私のようなパソコンアレルギーの人間がパソコンの話題ならぜったい発言は出来ないが、「自然」に関する話題なら、発言までしたくなる。発言したら、メールを開くのが楽しみになる。不思議ですね。

#### (4) イベントによる波及効果

学生にしろ、村外社会人にしろ、多くは実際山田村の地を踏んで村民のだれかしらと直に話す機会をもった後にメーリングリストの一員となるというケースが多い。それぞれの日常生活を持ちながら、日常とは別の現実の山田村に触れ、新しいネットワーク上のコミュニティを体験をすることになる。そこでは、しらずしらずのうちに、山田村の秩序とルールを踏襲するという状況がおきている。

こうした状況は、ネットワークで語られる多くのことを、現実のイベントとして実現させることへと比較的スムーズに導くことにもなっている。当初は、村の行事に外部者が参加するという交流の形が多かったが、最近で

は、山田村のメーリングリスト上で、村民と外部者が新しいイベントを話し合い企画し実際に実行するという形に変わってきているのもその現れである。また、村でイベントが企画されることの意味は、村外者が村へ来やすくなることのみならず、村民がネットワーク上ではない口コミで参加するというチャンスをも拡げている。

こうして、村民同士の中にもまた新しいネットワークが作られつつある。もともと点在した集落毎に結びつきの強い傾向のあった村では、同じ村にいても話をしたことがないという人同士がこうしたイベントに参加することにより、互いの集落の情報や村の歴史を話合う機会が得られているのである。

そして、催される行事は昔ながらの村祭りでみられる共同体験・共同作業なのである。

村の50代の女性の久々のメールに30代の女性が返事をしたメールでは、

メールで何か発言したことに誰かが答えてくれたり、いろいろな話題に発展していったりしてとても楽しんでいます。なにより山田に来てから3年、集落外の事を殆ど知らなかった私ですが、メールを通じて沢山の方々を知りました。××さんを筆頭に、メールを介して知り合った方々は、自分の損得無しに、皆の為に行動される、人間的な魅力にあふれる人達ばかりです。〇〇さんもお忙しい事と思いますが、どんどんメールやイベントにお顔(?)を出して下さいね。そうしたら、もっともっとメールを開けるのが楽しみになってきますよ、きっと。

#### (5) まとめ役の存在

こうしたイベントがなぜ実現していくのかを考えると、村民にも外部社会人にも、それぞれの窓口となる人材が存在していること、窓口以外にもそれぞれが担当の名乗りをあげ、協力する体制が比較的早くできることがあげられる。また、イベントが終了したあとの報告（簡単なもの）や感想は即日なされ、参加

できなかった人にはホームページでその様子が報告されることもある。普通、ネット上で企画されたイベントは、責任が伴う時点で実現しなかったりやっぱなしという事態に陥ることが多い。

山田村の情報センターの担当者は、次のように語っている。『これまでに、実験や研究という名のもと訪れたグループの企画に対し、村民を集め調整し協力したにもかかわらず、やりっぱなし、急な取りやめ、話だけということに振り回されてきた。その結果報告もほとんどない。誰がいつ、なにを、どう終わらせるのかが曖昧で、結局最後は村が後始末をする事態になっている。あれだけネットワーク上で準備をしてきた学生のふれあい祭にも少なからずその傾向がある。ネットワーク上だけの企画は、責任の所在がいい加減でも話が進むという危険性が強い。その点、「村外社会人グループ」との企画は必ず手応えがある。これが互いの信頼感を生んでいるのではないだろうか。』

互助というシステムに慣れている村民とボランティア活動をしてきたメンバーがいる村外社会人という要素がうまく合致したことと、イベントがもたらす効果を互いに重要に考え始めたことがその基盤にある。

#### (6) 村の活性化へむけて

メーリングリストで見る限り、そのメンバーが広げる輪は、少しずつではあるが村の中に浸透している。また、村民が互いに村の活性化に向けてメーリングリスト内で気軽に意見を言い合える雰囲気がつくられている。<sup>\*12</sup>さらに、パソコンの質問だけでなく農作業のヒントを教えあったり、互いに村の歴史を見つめ直すきっかけをつくったりと、村民の生活の中への活性化はその緒についたと言えるであろう。

しかしながら、村全体からみれば、メーリングリスト加入者以外のパソコン利用は、いまだ村民に十分に浸透しているとは言えない。メーリングリストの管理局でもある情報セン

ターは、さらなる生活の中へ入り込んだ情報化を目標としている。そのために、一つには、村民ひとりひとりのパソコン利用をバックアップし、個々人の力をつける講習会を企画したいとしている。これまで見てきたように、情報化の取り組みやイベントが住民のやる気を促していることは明らかであるので、こうしたイベントを続けていく努力は不可欠であるが、それがそう簡単なものではないことも容易に想像がつく。

また、もう一つは、村にある組織（行政、小中学校、商工会、農協）内部の基盤づくりと組織同士の連携が急務である。村の活性化の目標の一つである産業の発展には、行政の他、村の産業の柱である農協や商工会などが自らの力をつけることと同時に、その一人一人がまずメーリングリストへ参加することで、個人の立場で、村民の声を聞き、相談し合い、情報を提供し合うことから始めれば、効果は大きいと考える。しかし、現在のところ、農協や商工会、小中学校に勤める者のメーリングリスト加入者は、ほとんどいないのである。

メーリングリストによる交流の広がりという結果は、村が当初考えていた情報化による活性化からみれば、副次的なことのよう映るかもしれない。しかし、実は情報化を進める上で一番重要な基盤づくりができつつあるのではないだろうか。この点については、さらなる調査と分析が必要である。今後山田村がもう一段階成功するために必要な努力が何であるのか、村の課題は限りない。

## 5. おわりに

現在、メーリングリスト上では、木や虫について詳しい村民を中心に、「昆虫王国」をつくる案が持ち上がっている。さらにこの先2～3ヵ月のイベントについては、すでに詳細な企画段階となっている。もちろんこうしたイ

ベントは、飛び入り参加はいつでも歓迎で、村民と村外者の交流のみならず、普段集落が違うため顔を合わせることもない村民同士が共通の話題を持つきっかけとなっている。イベントに参加した村民同士の会話の中から次々と新しいイベント案が生み出されつつあることも特筆したい。

会津泉は、H. ラインゴールドの著書『バーチャル・コミュニティー』の解説の中で、『バーチャルコミュニティーの本当の価値は、何気なく続く日常の会話のさりげない交流の積み重ねの中にこそある』<sup>6)</sup>といているが、これが相当な努力を伴わなければならないことまでは述べていない。われわれの山田村での調査が示すところによれば、こうした努力それ自身の中に山田村の特徴が色濃くでていることである。そのひとつには、住民自らがイベント（山田村で年間に行われるいろいろな行事のこと）の「集人力？」、人を集める、人がそこに集まる機会をうまく利用して、それに絡めてコンピュータ利用の促進と住民への広がりを実現していったことがあげられる。この際、メディアによる宣伝力によって引き寄せられた数多くの支援者グループをうまくそのイベントに引き入れていったことは注目に値する<sup>3,4)</sup>。こうしたその時には一見なんでもない「事件」が、そこで起こり、それがさらに次のイベントへつながり、そのたびに村民と村外のメンバーが増えていくことが起こっている。このさり気なさ、自然体でことが運ばれていく、外部支援者を引きつけ、その支援を吸収していく力、というような個々の出来事が山田村の情報化をいまのところ特徴づけていると断言してよいだろう。

さらに、この一年の間にはっきりとした「私たち」として定着した一つの活動形態がみられるようになった。それは、イベントの開催や準備、その反省が大きなきっかけとなり、そこで利用されるようになったメーリングリストへの村民の関心であった。その発生の経

緯やその具体的な活動内容については第2、3章に述べてきたのであるが、山田村の「メーリングリストを介した会話の輪」が、一般的に都会型CMC (Computer-Mediated Communication) が形成するとされるコミュニティーと大差のないものであるのかどうかは、データの分析とこれからの調査の続行によるものでなければ今のところ何とも言えない。ただし、事実のみを一つ取り上げるとすれば、メーリングリストのメンバーは実名で登場し、先に述べたイベントを通じての大多数が顔見知りであるということである。

サイバースペースとか、バーチャルコミュニティーと呼ばれる新語によって、コンピュータを介したコミュニケーションの革新性や新規性を議論することが盛んである。しかし、その波間に実際に漕ぎだした富山県の一山村を調査している者にとっては、新しい言葉が持つ目新しい未来形がメーリングリストの各メンバーの実生活をみるにつけ現在形に引き戻されて、ハイパーリアリティーなんかではなく、まさに村民と支援者の協同で作り出されたリアリティーがあるのみという実感しか今のところ感じられない。

最後に、本稿をまとめるにあたり、山田村当局や村民、山田村を支援されている多くの方のご協力をいただきました。また、本研究の一部は、文部省科学研究費補助金（萌芽的研究）「地域情報化における社会的支援の調査研究—富山県山田村を題材に一」の援助を受けたことを付記します。

## 注 釈

- \* 1 日本各地の地方自治体は、地域の活性化や自らの情報発信、都会との情報格差の解消、行政サービスの向上などを狙いに情報化を進めている。しかしながらその方法は、インターネットのサーバーやアクセスポイントを設置したり、CATVで相互通信ができるようにするというものがほとんどである。どの方法にも大きな差はなく、多くの地域では、あたらしく設置した情報システムを各住民にどうやって使ってもらおうかという課題を共通にもっている。(富山情報センター「地域情報化事例集」及び、「情報化白書」96-98年版に掲載された41県85地区の事例から)
- \* 2 今回の調査にあたっては、インタビューや電子メールでの問い合わせ、メーリングリスト以外に、次の資料を参考にした。
  - ・情報化のあゆみ(山田村情報センター)・山田村訪問者記録(山田村情報センター)
  - ・めざそう山村ユートピア(山田村ふるさと塾第2期生活動の記録)
  - ・生涯学習要覧(山田村教育委員会)・山田村広報(平成7年1月~平成7年8月)
  - ・ふれあい祭パンフレット('97, '98)
- \* 3 山田村総合計画(1993~2002年)は、山田村の豊かな資源と空間を活かした新しい村作りを模索し実現させるために1993年に作成された。その施策の一つ「人づくり」の一環として「ふるさと塾」があり、山田村地域づくりの学習と取り組みを進める狙いでさまざまな研修や行事を体験させたものである。現在は3期生を迎えているが、特に今回の祭りの推進母体となった2期生は、20歳代から50歳代までの男性10名、女性4名の計14名の活動的なメンバーであった。
- \* 4 「パソコンリーダー」は、山田村23地区のそれぞれから選出された45名の男性を中心とした情報化の担い手であり、村民にとって気軽な相談相手であり講師である。もっとも、そのリーダー相互間にもコンピュータ経験の度合いや知識に差があり、地区毎の格差など難しい面もあった。
- \* 5 1997年7月26日から8月3日、少しでも村の情報化の役に立ちたいとの呼びかけに集まった全国の学生がボランティアとして村民の活動に協力し、生活に密着した情報化の未来について語りあうイベント「電脳村ふれあい祭り'97」が実施された。この祭りは、学生が村の情報化を支援するという目的を持ちながら、祭の行事には双方が企画し助け合い、期間中の学生の生活は、受け入れる村が宿泊や車の手配等日常の細かいところで支援するという形がとられた。
- \* 6 「こうりゃく」とは、山田村の方言で力を合わせる(合力)、手助けするという意味をもつ。学生をこうりゃくしようと集まったメンバーであるため「こうりゃく隊」と名付けられた。
- \* 7 高岡市を中心とした企業人、大学教員、ボーイスカウト、個人経営者などの集まりで、山田村の手助けをきっかけに集まったグループである。通常「山田村を勝手に応援する会」と言われるが、メンバーは一定しておらず、必要な時に声を掛け合い助けあうという関係である。
- \* 8 筆者が入会した12月初めまでに、100通ほどのメールが交わされているが、全て12月分として合算した。
- \* 9 昨年村に来た学生で社会人となったものも学生と分類
- \* 10 パソコンのモニターに関する質問メールに関する会話(抜粋)

Aさん(村民、初心者)：メールやインターネットを見ていて、たまに画面が一瞬消えてしまいます。いつもヒヤッとするのですが、これはなぜでしょう。そして2回程システム終了で電源が切れなくなって、裏のスイッチで電源を切りましたが、画面が消える事と関係があるのでしょうか？

Bさん(村外者)；何人かのメカニックに相談したのですが、はっきり特定できないでいます。結論を先に述べますと、「モニターの可能性が高い」ということです。どうも、その黒くなる現象を自分の目で見ないとわかりません。6月に何回か山田村を訪れる予定なのでその時にでも見ることができればいいのですが。

Cさん(パソコンリーダー)；横から口をはさむようですが、山田村に入っているマックのパソコンの型式ですが実は下記なのです。…中略…Aさん画面が真っ黒になるの治りましたか、近くにFさんが居られますので相談されるのが一番早いです。私も、毎日Aさんの家の前を通って仕事に行ってます。

Dさん(村外者)；私のうちのPCも同様の現象が起きたことがあり、修理に出しました。私の時は「パチッ」という音とともに一瞬画面が暗くなるというものでした。おそらくスクリーンセーバーなどが原因ではないと思います。

Aさん；消える時、殆ど音はしていません。皆さんにもご迷惑おかけしちゃったわが家のパソコン、今度Cさんがおっしゃる通り、一度Fさんに診て貰います。

Fさん(Aさんの集落のパソコンリーダー)；原因は良く分かりませんがメモリーが足りないので仮想メモリーを使用しています。…中略…メモリーを増やすかこまめにフロッピー保存してメールの受信を削除した方が良くと思います。いつでも相談して下さい。

\*11 「パソコンお助け隊」は、ふれあい祭の主テーマである村の情報化を支援するために考えられたもので、2～3名の学生が支援を望む家庭を訪問して個別に手助けしようという試みである。

\*12 パソコンリーダーの役割についての村民同士のメーリングリスト上でのやりとり

〇〇です。パソコンリーダーとして何をやれば良いのか、正直言って迷っています。どんな誘いかけやみなさんが興味を抱く話題提供、講習会の開催がいいんでしょうか。

××です。〇〇さんに同感です。…(中略)…  
この議題についてはいつか別の機会にゆっくり話あいたいともまだ思ってます。  
使わない村民がだんだん遠くに行っちゃいそうで心配です。

△△です。休眠家庭の活性化については、まず電子メールの送受信が出来るようになれば、他のツールにも関心が広がるだろうと思っていました。この考えは間違っていないと思う。先般の講習会に参加してマスターした人が周りの1, 2人に増え、さらに…、つまり、ゆっくりではあるがネズミ算的(?)に普及して行くんじゃないかな。これってあまりに希望的(楽観的)過ぎるんですかねえ。もっとアクティブな進み方が必要ならば、…(中略)…

これらを総合的に対処するチャート式マニュアルを作ったらどうだべかね。

なにしろ国内初の試みです。どこにも参考になる例が無いんだもの(笑)。

解らない事があると、片っ端から聞いて回る鈍なオジサンです。初めてマウスに触れた時から今日まで説明書を開いたことが無いんです。だからこその他の皆さんにもその幸せをお裾分けしてあげたいですら。

今の山田村の一番の強みは、各々が分厚い説明書とにらめっこしなくてもマスター出来る、というところだと思います。(オラみたいに)



## 文 献

- 1) 小松裕子・小郷直言；「情報技術の導入時における社会的支援の在り方」，高岡短大学紀要，VOL.10, PP.99-116, 1997.
- 2) 小松裕子・小郷直言；「電腦山田村への道」，大阪大学大型計算機センターニュース，Vol.27, No.2, PP.19-32, 1997.
- 3) 小松裕子・小郷直言；「山田村における電腦化への支援—ふれあい祭とパソコンお助け隊の記録」，高岡短大学紀要，VOL.11, PP.109-126, 1998.
- 4) 小松裕子；「インターネットでおこす地域情報化の風」，(木村幸信他編著「インターネット交遊学」，高岡短期大学開放センター，PP.23-32, 1998).
- 5) 池田謙一；「ネットワーキングコミュニティ」，東京大学出版会，p79, 1997.
- 6) ハワードラインゴールド，訳・解説：会津泉；「バーチャルコミュニティ」，三田出版会，p545, 1995.

## **Yamada Village As seen from Its mailing list**

Yuko KOMATSU and Naokoto KOGOU

(Received October 15, 1998)

### **ABSTRACT**

About ten months have passed since Yamada village started its mailing list service. There are 142 of subscribers to the list of which 65% are village residents and 35% are those who live outside of the village. Many of those living outside of the village participated in the past in such community events sponsored by the village as "Yamada Village Friendship Festivals" and/or "Courses On Electronic-mail", and they took a strong interest in the information-oriented community. They have been supporting the village residents since then in the computerization of the village.

The exchanges of messages by subscribers to the mailing list have been playing a significant role in revitalizing of the community, helping people organize a variety of community events to attract more people to the village.

This paper describes how the village residents and the non-resident supporters cooperate in their activities, and then analyzes the mailing list exchanges to show how the villagers strive to develop their information-oriented society on their own.

### **KEY WORD**

Yamada Village, Mailing list, Support, Information-oriented society, Information technology, Internet